The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	里村紹巴と奈良連歌 ： 『狭衣物語』享受史研究の一助として
Author(s)	川崎, 佐知子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2000, 34, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47894
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

里村紹巴と奈良連歌

――『狭衣物語』享受史研究の一助として――

川崎佐知子

一　はじめに

連歌師里村紹巴は、天正十八（一五九〇）年、狭衣注の嚆矢『狭衣下紐』を著す。『狭衣物語』・『狭衣下紐』の現存伝本をみると、紹巴が自ら所有する本の書写をしばしば求められていることがうかがい知れる。その中に、奈良の好士に伝わる一群が存する。実践女子大学図書館常磐松文庫蔵で中臣祐範の識語を備える『さころも』（物語四冊・下紐二冊の全六冊）、および、東京大学史料編纂所蔵押小路家旧蔵で宗具の識語のある『さころも』（物語四冊・下紐一冊の全五冊　函号押小路家本さ・3）である。(1) それぞれ、つぎのような識語を持つ。

此狭衣抄二冊臨江斎紹巴／被注之依許可書写之畢／天正廿年三月日　中臣祐範

（実践女子大学図書館常磐松文庫蔵『さころも』第六冊末識語）

右抄法眼紹巴述作之時分相伝也是此物語／義理之濫觴歟尤可仰可終後年加奥／書与嫡子者也／慶長己亥林鍾中旬　宗具

（東京大学史料編纂所蔵押小路家旧蔵『さころも』第五冊末識語）

祐範は奈良春日社家（東地井家）、宗具は奈良興福寺成林坊僧徒で、ともに『明翰抄』・『顕伝明名録』では奈良連歌師とされる。近世初期の奈良には興福寺・春日大社を中心とする歌壇が存在した。[2] その一員である祐範と宗具は、奈良連歌、ひいては奈良文化の担い手であったと考えられるものの、活動の実態は未分明といわざるを得ない。

そこで、本稿では、紹巴と奈良連歌師との交流を、種々の資料に基づいて確認したい。先学のすぐれた考察[3]にも照らしつつ、近世初期の奈良で展開される文化的活動の一端を照射し、『狭衣物語』享受史研究の一助としたい。

二　紹巴の出自と奈良連歌の由来

紹巴は、大永四（一五二四）年（大永五〔一五二五〕年とも）、一乗院殿御小者頭松井昌祐の子として奈良に生まれる。奈良とのつながりの発端は、その出自に求めるべきであろう。紹巴の奈良在住時の連歌の師は大東正云である。天文二十四（一五五五）年五月十四日『正云古人一廻山何百韻』（大阪天満宮御文庫蔵『連歌十四巻』〔函号れ5・27〕所収、発句作者は紹巴）に、大阪天満宮神主滋岡長松によるつぎのような朱注が残る。[4]

正云者南都大東／春日社家大東庶流也
海老屋ト云町家之先祖ナルヘシ／紹巴ヲ連歌師ニ取立タル人歟／此子孫正可物語ニ聞侍リ

京都に移ったのちも、紹巴はたびたび故郷の奈良を訪れている。天文二十四（一五五五）年三月二十六日より同晦日の『亡父二十回忌追善独吟』は、父ゆかりの奈良当尾で興行される。[5] また、元亀二（一五七一）年三月二日より、奈良・吉野などを訪れたことは、『二条宴乗記』に詳しい。同記の同年三月五日条に、[6]

五日　天晴。千句今日ヨリ有之由、竜雲院にて有之。紹巴母追善。〈後略〉

とあり、興福寺龍雲院で、紹巴が母の追善のための千句連歌を興行している。(7) また、『多聞院日記』天正二十（一五九二）年四月十二日条は、老境の紹巴（当時六十九歳）が郷愁に誘われて故郷を訪問したことを記す。その一連の記事に、

一紹巴兄死去付、来十五日弔連哥、懐旧、
夏山もかたえ色なき朽木哉　紹巴

と、兄の死を悼む連歌の興行と紹巴の発句が残る。以上のように、自らが出生した地ゆえ、親兄弟ゆえ、紹巴は奈良に頻繁に足を運んだのであろう。紹巴の行く先では連歌が催され、多くの人々が集う。こうして、紹巴は、奈良の文化人との関係を深めていったと想像する。

安永九（一七八〇）年六月九日、南都の儒医林田宗定の『奈良林田千句』は、現在、大阪天満宮御文庫に蔵される〔函号れ6・1〕。その第六百韻の句上のあとに、奈良連歌の由来が記される。(8)

此秀成のおのこ取分うゐ〳〵しけれど、宗定か先師上総介兼兵部権少輔秀延か養子也。秀延より七世の祖を左京亮元知と云。即奈良連歌の中興也。紹巴之時と同歟。紹巴も我里の生れ也。父は松井の何かしとて、一乗院殿御小者頭也。其家よく連歌せり。奈良連歌ニ紹巴の式を取ませ用るは此よしなり。

連衆秀成の養父は秀延といい、興行者宗定の師でもある。秀延より七世遡った祖先は元知で、紹巴と同時代の奈良連歌の中興と賞される。また、奈良は紹巴の故郷であるゆえ、奈良連歌は紹巴の式目を取り混ぜ用いるとする。

元知は、中沼氏。一乗院尊政の諸大夫・左京亮。伝未詳だが、(9) 連歌作品に多く名をとどめる。紹巴との同座は、

慶長三（一五九八）年二月晦日『初何百韻』、慶長四（一五九九）年九月十八日『山何百韻』（後掲【表】ナ）に認められる。元知の活躍は、紹巴没後の慶長年間以降が中心で、主の一乗院尊政との関係にも配慮しなければならないだろうが、のちに中興と謳われるほどの隆盛の基盤に、紹巴からの影響があったとされることは注目に値する。

紹巴は、豊臣秀吉・秀次のもとで著名な武将・文化人と交流し、連歌史の一時代を築いた。その華麗かつ波瀾万丈な生涯の底流で、故郷奈良との縁を貫いていた。奈良連歌は、紹巴を指標と仰ぎ、中興の時を迎えるのである。

三　紹巴と祐範・宗具

祐範には、慶長四（一五九九）年の春日社正預就任以来の神事日記『春日社司祐範記』がある。[10] 現在、春日大社と内閣文庫に、慶長・元和年間の自筆本が蔵される。芸能・文芸に造詣の深い祐範の日記だけに、関連記事は豊富で、近世初期の興福寺・春日大社を中心とした奈良歌壇の動向を探るうえでの好資料といえよう。連歌の記録も多く、そこに書き留められる発句のほとんどは『連歌総目録』（平成九年　明治書院）にみえない。

『春日社司祐範記』慶長七年記〔函号日・74〕七月廿二日条は、慶長七（一六〇二）年四月十二日に中風で没した紹巴のための追善連歌興行の記事である。宗具のもとで宗具月次衆が催し、祐範は発句を求められている。

一廿二日　於宗具、紹巴翁追善興行有之。彼月次衆催之。発句事所望之間。不顧憚旧好不忘也。

うつもれぬ流すゝしき苔地哉

紹巴、去四月十二日逝去七十九歳、従去年中風減気之処、俄再発シテ終落去了。四十五六年以来蒙芳言厚恩不浅者也。此興行、去六月十二日始定之処ニ、奈良中検地之儀ニ諸人取就故、延引了。会席各馳走共、及夜陰大酒也。巴公、現在之砌懇志共申出催愁涙了。[11]

（『春日社司祐範記』慶長七年記　七月廿二日条）

右は、永島福太郎氏の紹介以降、紹巴の死因や生没年確定のための資料として注目されてきたが[12]、祐範・宗具に視点を移しても興味深い記事である。当時、宗具は月次連歌を催していたようである。宗具、およびその月次衆は、奈良連歌の指導者としての紹巴から、多大なる影響を受けていたのであろう。それゆえ、右の追善興行となったのではないか。また、祐範と紹巴の交流は四十五、六年におよぶという。慶長七（一六〇二）年当時、祐範は六十一歳[13]。逆算すれば、弘治三（一五五七）年（紹巴三十三歳、祐範十六歳）、または、永禄元（一五五八）年（紹巴三十四歳、祐範十七歳）よりの旧知となる。かなり若いころから、祐範は紹巴の指導を仰いでいたことが知られる。

四　作品

紹巴と祐範・宗具の関係を、次頁以降の【表】に掲げた実際の連歌資料によってみていきたい。

現存の連歌資料での祐範の初出は、永禄七（一五六四）年三月十五日の春日若宮社祐根興行蒔絵文台開『何人百韻』（【表】ア）である。以来、天正十八（一五九〇）年四月の独吟千句（【表】タ）を除いて、永禄・元亀・天正年間のすべてで紹巴と同座することが確認できる。前掲『春日社司祐範記』慶長七年記七月廿二日条の紹巴との交流は、ここに反映すると見てよいだろう。

宗具の初出は、天正九（一五八一）年十二月一日『何人百韻』（【表】ス）である。以降、おもに慶長年間に出座し、紹巴のほか、昌叱、心前、紹巴の息玄仍・玄仲、昌叱の息昌琢などと一座する。この宗具の活躍時期は、天正末年から慶長年間の『多聞院日記』に宗具が頻出するとした木藤才蔵氏の指摘とも一致する[14]。

宗具の月次連歌の作品としては、慶長六（一六〇一）年二月三日『何人百韻』（【表】ノ）が該当する[15]。『春日社司

【表】

	興業年次	場所・興行者・目的など	種別	発句	連衆	典拠・関連記事
ア	永禄七（一五六四）年三月十五日	春日若宮神主祐根蒔絵文台開	何人百韻	藤かえやあまたの木木の花盛	紹巴・祐根・喜・祐範・宴乗・栄甚・成弘・宗治・心前・利成・全佐・昌左・和・秀安・重時・正順	大阪天満宮『連歌千三百韻』（れ5・12）、大阪天満宮『古連歌千五百』（れ・甲20）
イ	永禄十二（一五六九）年八月二十日	於喜多院殿御興行	何人百韻	鹿の音も花のふしとや忍草	紹巴・祐範・喜・昌叱・心前・江三位・昌佐・宗治・利盛・慶空・昌乗・宗圭	早稲田大伊地知文庫『集連』（20・39）
ウ	永禄十二（一五六九）年八月二十三日	於龍雲院紹巴興行	何路百韻	虫の音もまちてやしたふ野への月	喜・宴乗・紹巴・江三位・宗治・祐範・心前・昌佐・利盛・和忠・重時・宗空・昌叱	早稲田大伊地知文庫『集連』（20・39）
エ	永禄十二（一五六九）年八月二十五日	於東地井宮内太輔許興行	何船百韻	一葉をもおしむはさそな下紅葉	紹巴・昌叱・祐範・心前・宴乗・昌佐・利盛・宗治・重時・重盛・宗圭・喜・江三位	早稲田大伊地知文庫『集連』（20・39）、大阪天満宮『古連歌千六百』（れ・甲14）、大阪天満宮『連歌十七巻』（れ5・24）
オ	永禄十二（一五六九）年八月二十八日	於喜多院殿御興行	何路百韻	朝霧や見せも聞せも松の声	昌叱・江三位・心前・紹巴・祐範・宴貞・宗治・喜・利盛・昌佐・重時・和忠	早稲田大伊地知文庫『集連』（20・39）
カ	永禄十二（一五六九）年九月一日	於龍雲院昌佐月次	何路百韻	山の色も今いくめくり初時雨	昌佐・昌叱・紹巴・祐範・心前・利盛・江三位・喜・和忠	早稲田大伊地知文庫『集連』（20・39）
キ	永禄十二（一五六九）年十二月八日		何船百韻	春またて雪けの沢や浅みとり	紹巴・渕慶・喜・祐範・江三位・利盛・昌佐・祐根・朝臣・宗圭・春辰	大阪天満宮『古連歌千五百』（れ・甲20）、『二条宴乗記』
ク	元亀二（一五七一）年三月五日〜		第一何船 第二朝何 第三何路 第四何木 第五何袋 第六（二条宴乗記） 第七初何 第八何人 第九何山 第十何垣	花にとふ袖は昔の匂ひかな あたに散花の名かくす嵐哉 花に月に世は風に雲もなし 滝の峰の花は見る流哉 古郷とおもはぬ花の色香哉 つまてみるや霞の花ならん かめにさす花にこもれる野山哉 露おもはの雪の哉 香のつたふや根さし春の水 音しほめたる花の夕哉	喜・紹巴・祐根・朝臣・了玄・利盛・宗仍・里・祐範・計・樹閑・重時・昌左・秀安・宗圭・和忠・江三位・昌叱	東北大狩野文庫『連歌集』（4・1094・1）、『二条宴乗記』、『多聞院日記』三月廿七日条

巴位仍盛玄前叱振喜

チ	タ	ソ	セ	ス	シ	サ	コ	ケ
文禄五（一五九六）年	天正十八（一五九〇）年四月十九日～二十三日	天正十二（一五八四）年十月十二日	天正十（一五八二）年十二月六日	天正九（一五八一）年十二月一日	天正六（一五七八）年二月十八日	天正二（一五七四）年二月十五日	天正二（一五七四）年一月二十六日	元亀二（一五七一）年三月十日
	祐範千句	法印順慶御追善於当庵興行南都竹田順治ニテ子息宗具発起也				於松林院殿・17句抄出	於多聞之城中坊駿河守興行明智発句	
第一何木 第二朝何 第三何人 第四初何 第五（二字表記）何路 第六何船 第七何夕 第八何墻 第九何 第十薄何	咲のほる花は久しきたち枝哉 春の日にころみえけり花の色 はこころみつたふ簾の雲 これの香や露よりすしき空涼み 花のこる雨かたひる玉 雲霧ころもをもしの高ねの月 夏ころもとはぬ月の秋の空 一せをよけやつまるはの月 とはかはあるかの山哉 しらのかりやはの 露ひとつ 雪にさへ松 つもれ猶あらはる深 ときは木にる今朝の雪	法文百韻	山何百韻	何人百韻	何路百韻	山何百韻	何人百韻	何人百韻
		せきなかす木葉を水の心かな	草草の根ふかき種は冬野かな	霜の花おもけにそよく小笹哉	かすむ夜の月にいふかし鐘の声	春の夜や在明の月の雲かくれ	立かへは霞をうつせみやはしら	月やふねさす棹川の夕霞
菊・祐範朝臣・楊・宗仙・	祐範	紹巴・英估・昌叱・紹与・心前・一利・宗具・全底・紹清・正順・宗知・能札・道為・玄仍	昌叱・和忠・心前・紹巴・覚祐・松前・江三位・慶尊・祐範・有俊・宗具・為政・於次	紹巴・和忠・心前・覚祐・玄桂・祐範・円尊・宗杜・宗具・有俊・為政・清政・重朝	紹巴・宗慶・心前・松・覚佑・祐範・昌左・江三位・実弘・乗珍・和忠・定朝	紹巴・松・喜・祐範	光秀・覚祐・喜・紹巴・江三位・永純・祐範・宗治・里計・重時・利盛・樹閑・昌左・和忠	紹巴・昌左・喜・昌叱・三位・心前・祐範・根朝臣・慶・連・英估・了玄・仍・宗治・重盛・視以・宗
		広島大福井文庫『連歌雑集』D1662	大阪天満宮『連歌十巻』〔れ・5・25〕、大阪天満宮『古連歌千六百』〔れ・甲14〕	大阪天満宮『古連歌千六百』〔れ・甲14〕、大阪天満宮『連歌十四巻』〔れ・5・27〕	秋月郷土館	天理大綿屋文庫『連歌集』〔れ・4・2-34〕	大阪天満宮『古連歌二千巻』〔れ・5・11〕、大阪天満宮『古連歌千句三物』〔れ・甲27〕、天理大綿屋文庫『連歌集』〔れ・4・2-34〕	大阪天満宮『連歌千三百韻』〔れ・5・12〕、大阪天満宮『古連歌千五百』〔れ・甲20〕、『一条宴乗記』、『多聞院日記』三月廿七日条
		大阪天満宮『祐範千句』〔れ・4・43〕、大阪天満宮『祐範独吟千句』〔れ・乙54〕						
宮内庁書陵部『連歌集』								

	一月十六日		紹九・正・僧・覚・情・上人・重弘・寿閑・能成・知・宗具・永・春・東・林・元書陵部『賦物連歌7』、宮内庁『4・5・6・50』、『多聞院日記』					
ツ	慶長三（一五九八）年七月二十一日	最上義光句　101	夢想百韻	ふるき枕そしほれそひぬる	義光・能札・光・久高・滋安・了・能以・伯・宗具・能喜・舜・昌・竺依・叶・友・益・和・能	〔5503・123〕、宮内庁書陵部『賦物連歌7』、『多聞院日記』〔456・50〕	広島大国文〔1248・N〕、国会図書館『連歌合集52冊』〔218・196〕	
テ	慶長三（一五九八）年八月十四日	南都宗治興行	何木百韻	鹿のねもさそな花野のすり衣	紹巴・景敏・宗治・為正・宗具・玄・玄佐・重・紹九・弘・仲・慶・紹・純・行・弘・九・	宮内庁書陵部『連歌』〔501・240〕、国会図書館『連歌』〔みず・97〕、天理大綿屋文庫〔れ・4・234〕、広島大福井文庫『集連書』D1666		
ト	慶長四（一五九九）年九月十七日		何木百韻	鹿のねも妻を忍ふのみたれ哉	紹九・元・玄・重・紹・左・弘・宗・正・治・知・桂・寿・為・閑・行・正・弘・能・成・	大阪天満宮四十八句『古連歌千六百又阪天満宮『連歌十巻』〔れ・25〕		
ナ	慶長四（一五九九）年九月十八日		山何百韻	松に花咲や葉こしの菊の庭	紹巴・覚・松・法・林・眼・院・情・上人・僧・都・玄・佐・宗具・元・知・祐範・有・朝・俊・臣・重・菊・弘・玄・行・宗・弘・幸・治・	宮内庁書陵部『連歌』〔501・240〕		
ニ	慶長五（一六〇〇）年八月十一日		何人百韻	花にきて猶秋の日のほともなし	友・貞・玄・与・了・宗具・了・味・玄・春・清・俱・英・知・実・底・仲・呆・乗・右・知・相・玄・景・林・口・了・仍・令・了・	宮内庁書陵部『連歌集』〔353・56〕、早稲田大伊地知文庫『連歌懐紙六種』〔20・3〕		
ヌ	慶長五（一六〇〇）年十一月十一日		何木百韻	見る見るもつき山たかし庭の雪	林・口・了・味・竺・依・能・円・英・知・了・俱・宗具・玄・与・直・清・呆・底・仍・友・省・紹巴・令・相・実・右・玄・	宮内庁書陵部『連歌集』〔353・56〕、宮内庁書陵部『賦物連歌8』〔456・50〕		
ネ	慶長五（一六〇〇）年十二月二十三日	南都御月並衆中より今年居ハ十七ニナラン藤千代もナクテ如此／懐旧心前十三回忌	懐旧百韻	しのふ草かれてととめし跡もなし	紹巴・他・阿・上人・昌・人・教・山・上・人・梅・吐・玄・松・仲・助・友・慶・益・玄・宗具・実・右・純・			
ノ	慶長六（一六〇一）年二月三日		何人百韻	山山のすかたことなる雪ま哉	紹意・祐範・宗具・永・俊・元・知・為・正・玄・左・宗・	大阪天満宮『連歌千六百又四十八句』〔れ・28〕、大		

	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ
	慶長九（一六〇四）年四月二十四日	慶長十二（一六〇七）年六月十二日	慶長十五（一六一〇）年八月二十四日	慶長十六（一六一一）年十一月＊日	慶長十八（一六一三）年五月二十九日	慶長十九（一六一四）年五月二十四日	ハナザカリ	ユキニユク	ユフナミノ
							一條院尊政僧正連歌点・評・跋紹巴	於南都竹田宗治興行	紹巴点連歌百韻
	懐旧百韻	何人百韻	何船百韻	何路百韻	山何百韻	何木百韻	百韻	何路百韻	百韻
	明やすき夜は夢なれや空の月	水のうへに露も浮葉の蓮かな	巌をも吹上ぬへき野分哉	月なから山の端曇るみそれ哉	飛火野のひかりは風のほたる哉	かけそひてやみはあやなき蛍哉	花さかりわくれは深き山もなし	雪に行なひき起ふし風もなし	夕浪の底よりちるや河柳
治・成政	昌茂・昌琢・生・玄仍・禅・高・芳・仲・紹景・宗[具]・貞繁・景次・玄常	紹意・貞次・松林・院法印・楊・元知・永春・清玄・宗[具]・重一・[祐][範][臣]	英滋・宗通・能順・番・宗先・了俱・宗[具]・玄岑・既在・慶純・元通・玄・昌琢・陳・昌傑・宣滋	親政・来祐・宗伝・宗吟・宗純・宗徳・宗[具]・三次	玄仲・正桂・祐長・正・実栄・宗治・永俊・寂順・善春・紹意・祐甫	楊・玄仲・[祐][範]・延通	楊・覚祐・宗[具]・[祐][範]・正珠	昌叱・宗[具]・紹巴・祐心・前・江・松・覚三位・兼如・[祐][範]・慶尊・宗治・円専・有俊・和忠・宗慶・定直	宗仙・紹九・宗[具]
阪天満宮『連歌十巻』〔れ5・25〕、『春日社司祐範記』	国会図書館『連歌合集55冊』〔2・18・196〕	大阪天満宮『連歌十四巻』〔れ5・27〕	京都大平松家文庫『集連』〔7・シ・26〕	筑波大北野文庫〔33〕	大阪天満宮『古連歌千六百又四十八句』〔れ・甲28〕、大阪天満宮『連歌十巻』〔れ5・25〕	大阪天満宮〔れ5・25〕、『連歌十巻』、大阪天満宮『古連歌千六百又四十八句』〔2・28・2〕、〔れ・甲28〕、柿衛文庫〔2・28〕、広島大福井文庫D166・6・6、天理大綿屋文庫『集連書』、『綿屋文庫『連歌集』〔れ4・2・34〕、『春日社司祐範記』	早稲田大伊地知文庫『古連歌百韻』〔20・41〕	広島大福井文庫『連歌雑集』D166・2	天理大綿屋文庫『連歌懐紙巻子本集40』

※『連歌総目録』（平成九年　明治書院）に基づき、祐範・宗具が出座する連歌資料を可能なかぎり原本で確認し、興行年次順に整理した。同名の別人を含む可能性もあるが、時代が大幅にずれる場合を除いてすべてを掲載した。※各作品に私に符号を付し、【表】の一段目に示した。※「連衆」は、一巡目の通りであるが、千句についてはその限りではない。紹巴・祐範・宗具は囲みをした。※「典拠・関連記事」には、原本資料名、および、『二条宴乗記』（『ビブリア』52～54・60・62号掲載の翻刻）、『多聞院日記』（増補続史料大成本）、『春日社司祐範記』（春日大社蔵自筆本の紙焼写真）の関連記事の有無をあわせて記す。※興行年次不明分は末尾においたが、ミ・メは紹巴の点が加わるので慶長七年以前、ムは心前が一座するため天正十七年以前、とそれぞれ推定できる。

祐範記』慶長六年記〔函号日・73〕の二月三日条に、つぎのようにある。

一三日　於宗具月次頭役沙汰之。紹巴ヨリ肴下候之間、為振舞申催了。亭主種々馳走共無是非義也。城戸衆珎肴共持参。大御酒也。

右は、紹巴より到来の肴を振る舞うために催されたという。宗具月次への紹巴の関与のあらわれといえようか。このほか、現存連歌資料に宗具月次のものは見いだせない。一方、『春日社司祐範記』には、宗具月次の記事は多い。

一廿五日　宗具月次へ出座了。　（『春日社司祐範記』慶長七年記正月廿五日条）
一廿五日　宗具月次へ出座候。頭人宗叔大酒也。　（『春日社司祐範記』慶長七年記八月廿五日条）

のように、祐範も出座する。紹巴の影響下にある奈良連歌師の具体的な活動の一端をみることができるように思う。

五　宗具の出自について

『明翰抄』・『顕伝明名録』で興福寺成林坊とされる宗具については未詳である。ただ、前節の【表】および、『春日社司祐範記』・『多聞院日記』により、活躍時期を絞ることはできる。ここでは、出自に関して、いまわかり得ることを整理しておきたい。

天正十二（一五八四）年十月十二日『法文百韻』（【表】ソ）に「法印順慶御追善於当庵興行／南都竹田順治ニテ子息宗具発起也」とある。宗具の出自を探るうえで貴重な記述と思われる。[16] これによれば、宗具は法印順慶の子息とも南都竹田順治の子息とも両様に解釈できる。[17] まずは、法印順慶と竹田順治がどのような人物かを確認する。

奈良に縁の深い順慶といえば、興福寺の官符衆徒で武将の筒井順慶（天文十八〔一五四九〕年～天正十二〔一五八四〕年）である。[18] 永禄九（一五六六）年、興福寺成身院で出家得度し、陽舜房順慶と称する。『多聞院日記』にも、法印順慶の動向が詳しく記される。順慶は、天正十二（一五八四）年八月十一日に大和郡山城中に没する（享年三十六歳）。同年十月十五日に盛大な葬送が執り行われている。[19]

順慶追善『法文百韻』の興行は、筒井順慶葬送の三日前にあたるので、この法印順慶が筒井順慶を指すことは明らかであろう。順慶に実子はなく、跡目は養嗣子定次が継承している。よって、宗具は法印順慶の息でなく、南都竹田順治の息と解釈できよう。ただ、順治は、『連歌総目録』・『明翰抄』・『顕伝明名録』に見いだせない。宗具の父は、南都竹田順治という伝未詳の人物なのであろうか。

もちろん、そのように結論することも可能である。しかし、ここでは、ひとつの仮説を提示したい。順治と同様、「南都竹田」を冠する宗治という人がいる。慶長三（一五九八）年八月十二日『何木百韻』（【表】テ）に「南都宗治興行」、興行年次不明の『何路百韻』（【表】ム）に「於南都竹田宗治興行」とある。宗治は『顕伝明名録』で「角寺僧」とされる。作歌活動は祐範にほぼかさなり、永禄・元亀から天正年間の前半には紹巴・昌叱・心前とも同座する（【表】アほか）。宗具よりは活躍時期が早いうえ、宗具の初出以後は同座の機会も多い。宗治は、『二条宴乗記』・『多聞院日記』・『春日社司祐範記』にも頻出する。『多聞院日記』天正十三（一五八五）年三月九日条には、

九日、十後来臨、宗治・宗具同道也、及晩迄遊覧了、

とあり、宗具とともに登場する。以上より、宗治は、奈良連歌師で、宗具と行動を共にすることも多い人物と判明する。一方、「南都竹田順治」とある順慶追善『法文百韻』の典拠は、広島大学福井文庫蔵本のみである。これは、福井久蔵氏による太田武夫氏蔵本の新写本である。[20] あるいは、「順治」は「宗治」の誤まりではないか。太田武夫氏蔵本焼失の現在、確認はできないが、誤写の可能性を視野に入れておきたいと思う。[21]

なお、奈良連歌師宗具を、加藤清正に仕えた江村専斎（諱宗具）[22] と同一人物とする説がある。[23] 活躍時期はほぼ重なるが、【表】や記録よりたどれる宗具の奈良での軌跡を勘案すれば、同名の別人物ととるべきだろうか。

六　おわりに

里村紹巴と祐範・宗具の関わりを中心に論じてきた。当時の奈良は、洛中の文化を吸収して独自のものとする力を持ち合わせた土壌であった。紹巴は、連歌の交流を通して奈良連歌師を導き、奈良文化の発展に貢献したといえるのではないだろうか。

注

（1）『狭衣下紐』の諸伝本の書誌は、拙稿「『狭衣下紐』諸本考」（『中古文学』第五十五号　平成七年五月）を参照のこと。

（2）奈良の文芸を総括的に紹介するのは、永島福太郎氏『中世文芸の源流』（昭和二十三年　河原書店）である。井上宗雄氏『中世歌壇史の研究　室町後期』（改訂新版　昭和六十二年　明治書院）は奈良における歌壇の存在を示唆す

る。木藤才蔵氏『連歌史論考』下（昭和四十八年　明治書院）は「奈良の連歌」を立項する。また、『俳文学大辞典』（平成七年　角川書店）は、奈良連歌師の覚祐・元知・祐範と「奈良連歌」の項目を立てる。

(3)　前掲注(2)の諸論考、石川真弘氏「興福寺関係連歌年表（稿）――紹巴時代――」（『大谷女子大国文』第十八号昭和六十三年三月）など。

(4)　両角倉一氏「紹巴小伝（改稿）」（『山梨県立女子短期大学紀要』二十一号　昭和六十三年三月）に指摘がある。

(5)　小高敏郎氏『ある連歌師の生涯』（昭和四十二年　至文堂）、奥田勲氏『連歌師――その行動と文学――』（評論社昭和五十一年）、前掲注(4)両角倉一氏論文に指摘がある。

(6)　『二条宴乗記』の引用は、『ビブリア』52号（昭和四十七年十月）・53号（昭和四十八年三月）・54号（昭和四十八年六月）・60号（昭和五十年六月）・62号（昭和五十一年三月）にそれぞれ掲載の翻刻による。

(7)　『多聞院日記』元亀二（一五七一）年三月廿七日条は、この千句連歌における発句を抄出する（第十何垣百韻発句（作者紹巴）・第三何路百韻発句（作者昌叱）・第一何船百韻発句（作者喜多院殿））。

(8)　『奈良林田千句』に奈良連歌の由来が記されることは、『俳文学大辞典』（平成七年　角川書店）の「奈良連歌」項（島津忠夫氏執筆）に指摘がある。なお、翻刻に際し、私に句読点を施した。

(9)　『俳文学大辞典』（平成七年　角川書店）の「元知」項。『顕伝明名録』は「元知　南都中沼左京」とする。

(10)　大東延篤氏『新修春日社社司補任記』（昭和四十七年　春日宮本会）によれば、祐範の正預在任は、慶長四（一五九九）年から、元和九（一六二三）年閏八月一日に八十二歳で没するまでの計二十五年間である。

(11)　引用は、春日大社蔵自筆本の紙焼写真による。翻刻にあたり、私に句読点を施した。以下の引用も同様。

(12)　前掲注(2)永島福太郎氏著書に初出ののち、前掲注(2)木藤才蔵氏著書、および、奥田勲氏「紹巴年譜稿（四・完）」（『宇都宮大学教育学部紀要』第二十三号第一部　昭和四十八年十二月）で引用。

(13)　『春日社司祐範記』慶長七年記の原表紙に祐範自筆で「六十一歳」とある。

(14)　前掲注(2)木藤才蔵氏著書。

(15)　前掲注(3)石川真弘氏論文も、両者を同じときのものとして扱う。

(16) 前掲注(2)木藤才蔵氏著書は、【表】ソの宗具と『明翰抄』の宗具が同一人物かどうか確定できないとするが、根拠はとくに示されない。

(17) 前掲注(2)木藤才蔵氏著書は、南都竹田順治の息とする。一方、上野英子氏「紹巴所持本狭衣物語と『下紐』をめぐる考察――巻一を中心に――」(『論叢狭衣物語1――本文と表現――』平成十二年　新典社)は、法印順慶の息ととる。

(18) 順慶の伝は、永島福太郎氏「筒井順慶」(『大和志』第六巻第十号　昭和十四年十月)、同氏「筒井順慶補考」(『大和志』第六巻第十一号　昭和十四年十一月)、『国史大辞典』(吉川弘文館)の「筒井順慶」項を参照。

(19) 順慶葬送の模様は、『多聞院日記』天正十二(一五八四)年十月十六日条に詳しい。

(20) 「福井文庫目録」(広島中世文芸研究会『中世文芸』五十号　昭和四十八年一月　中世文芸叢書別巻3)を参照。

(21) 春日大社宝物殿主任学芸員松村和歌子氏より、春日大社蔵石燈籠〔御・335〕の銘に、「大永五年乙酉卯月廿一日／施主竹田坊敬白」とある由、ご教示いただいた。「南都竹田」については、今後も検討したい。

(22) 「江村専斎」の伝は、『近世畸人伝』に詳しい。

(23) 実践女子大学図書館山岸文庫蔵『狭衣下紐』(神宮文庫蔵『狭衣下紐』の山岸徳平氏新写本)に、山岸徳平氏の考証で「宗具　江村氏号専斎又伝倚松庵　京都之儒人而医家也　交幽斎長嘯子等能和歌矣　寛文四歳次甲辰一月二十六日歿享年一百歳也　慶長巳亥四年宗具三十五歳也」とある。また、前掲注(17)上野英子氏論文は、奈良連歌師で江村専斎とする。

[付記] 成稿に際し、春日大社、大阪天満宮御文庫をはじめとする諸文庫・図書館より、多大なる学恩をたまわりましたことを深謝いたします。

(大学院後期課程学生)